献　　辞

堀和生教授は，2016 年 9 月に 65 歳の誕生日を迎えられ，2017 年 3 月 31 日をもって，本学を退職されることになりました。

先生は大分県速見郡でお生まれになり，1975 年 3 月に龍谷大学文学部史学科東洋史学専攻を卒業後，京都大学文学部聴講生を経て，1977 年 4 月に京都大学大学院文学研究科修士課程国史学専攻に進学, 1979 年 4 月には博士課程へ進まれ, 1982 年 3 月に研究指導認定を受け退学をされました。その後，京都大学研修員，日本学術振興会奨励研究員として研鑽を積まれ，1989 年 6 月に本学経済学部の助教授に着任されました。1997 年 4 月に教授に昇進され，この間，長きにわたって本研究科及び本学部における教育・研究に尽力されてきました。

また，先生は本学在任中も，大韓民国ソウル大学校経済研究所特別研究員，ソウル大学校世界経済研究所特別研究員，台湾中央研究院近代史研究所訪問学者として，植民地期及び解放直後期の朝鮮・韓国経済，光復前後の台湾経済の研究に従事されました。1994 年 7 月には本学より経済学博士の学位を得られています。

先生はこれまで，日本を含む東アジア経済史，植民地経済史に関する多数の著作を内外に公表してこられました。初期には，植民地朝鮮の農業や財政等の諸政策，地主制，金融業，電力業に関する論文を執筆されていますが，これらを「朝鮮工業化論」としてまとめられ，戦前の植民地時代と戦後の経済発展を架橋する壮大な歴史像を示されました。1995 年に出版された著書『朝鮮工業化の史的分析――日本資本主義と植民地経済――』は日本の学界に大きなインパクトを与えましたが，韓国語にも翻訳され，国内外で広く議論を呼び起こしました。

その後，さらに朝鮮・韓国以外にも台湾・満洲に関する実証研究を積み重ねられ，より包括的・体系的に東アジア NIEs 成立の諸条件を展望した「東アジア資本主義史論」を展開されています。2009 年に単著として刊行された『東アジア資本主義史論　第 1 巻――形成・構造・展開――』のほか，編著書の『東アジア経済の軌跡』（2001 年）、『日本資本主義と朝鮮・台湾――帝国主義下の経済変動――』（2004 年），『東アジア資本主義史論　第 2 巻――構造と特質――』（2008 年），『東アジア高度成長の歴史的起源』（2016 年）などでも，綿密な実証に基づく大胆な問題提起がなされました。これらの編著書の一部は韓国語や中国語で翻訳書が刊行され，また英語で発表された論稿もあり，「東アジア資本主義史論」をめぐる議論は国境を越えて広がりつつあります。

先生ご自身も，韓国の著作物の日本語訳をされているほか，韓国語，中国語，英語を駆使されて，多くの国際シンポジウムや国際共同研究を組織されてきました。近年では，中国も取り込んだ比較研究を進められ，東アジア資本主義の成長要因を日本やアメリカとの関係で大きく捉える視座を学界に提起されています。

先生は，長年，貿易統計の膨大なデータベースの構築に傾注されてきました。日本・朝鮮・韓国・台湾・中国の長期時系列による品目別・相手国別の悉皆データベースは，これまで存在しなかった大規模なものであり，国内外の学界に大きな貢献を果たしています。貿易統計の数値データに基づく確かな実証によって，戦前・戦後の国際分業の実態がより明らかになりました。先生が論じている東アジア資本主義の特質――日本帝国主義に牽引された帝国地域全体の工業化と，その歴

史的条件に規定された戦後の東アジア諸国の高度成長――も，この膨大な貿易統計データの分析に裏づけられたものです。

以上のように，先生は，長年，精力的に研究に従事されてきましたが，それと同時に教育にも力を注がれ，多くの研究者を世に送り出されています。

先生は，京都大学で数々の委員を歴任され，とくに留学生教育や国際交流にご尽力されてきました。また，2002 年の上海センター（現東アジア経済研究センター）の設立事業に取り組まれ，今日までその運営に携わってこられました。さらに，2011 年に経済学部の調査資料室を改組して設立された経済資料センターのセンター長を務められ，京都地域を中心に企業・経済団体が所蔵する貴重な一次資料の発掘収集と公開事業に取り組んでこられました。経済学部図書室や資料センターの図書収集にとりわけ尽力してこられ，くわえて先生ご自身が国内外で収集された貴重な統計書や多数の蔵書を寄贈されており，本学の図書と研究資料の充実に多大なる貢献を果たされています。

京都大学経済学会は，先生の多年にわたるご功績への敬意と学恩に対する感謝の気持ちを込めて，『経済論叢』の本号を記念号として編集いたしました。先生のご指導を受けた方々や所縁のある方々から寄せられた論文を編んで，本号を先生に捧げることができますことは，私どものこの上ない喜びであります。

先生が，今後とも，ますますご健康で，学界のため，また広く社会のためにご活躍なされますことを心から祈念いたします。

2016 年 11 月 1 日

京都大学大学院経済学研究科長　文　　世　一